

## 時代が求める生涯学習の役割とは？

パネリスト	国立教育政策研究所生涯学習 政策研究部総括研究官	笹井宏益氏
	札幌リーディングサービスグループ会長 フリーキャスター	田中隆子氏 林美香子氏
	医師・札幌市生涯学習推進検討会議座長	久村正也氏
コーディネーター	北海道大学高等教育機能開発総合センター教授・ 札幌市生涯学習推進検討会議副座長	木村純氏

---

司会 それでは、時間になりましたので、ただいまよりパネルディスカッションを始めたいと存じます。

まず最初に、コーディネーターの木村純様を御紹介させていただきます。

木村様は、北海道大学高等教育機能開発総合センターの教授をされていらっしゃいますが、この札幌市生涯学習センターで実施している、さっぽろ市民カレッジの運営等について協議するさっぽろ市民カレッジ企画委員会の委員長も務められ、ボランティアに関する講座の講師もされていらっしゃいます。また、札幌市社会教育委員会議副議長、同じく生涯学習推進検討会議副座長を務めていらっしゃいます。

続きまして、パネリストの方の御紹介をさせていただきます。

まず、向かって左側にお座りいただいておりますのが、札幌心身医療研究所、所長でお医者様の久村正也様でございます。

久村様は、北海道医療大学の生涯学習委員会委員長を務められ、大学開放や市民講座に携わっていらっしゃいました。また、札幌市社会教育委員会議議長、同じく生涯学習推進検討会議の座長を務めていらっしゃいます。

そのお隣が、フリーキャスターの林美香子様です。

林様はイベントの司会やFM北海道のパーソナリティー等で御活躍されています。また、食や農、地域づくりに関するシンポジウムや講演会に講師やパネラーとして参加されていますが、今から3年前に北海道大学大学院工学研究科に社会人入学され、本年9月に博士課程を修了されています。

そのお隣が、札幌リーディングサービスグループの会長の田中隆子様です。

田中様は、フリーアナウンサーや朗読教室の講師として活動されていらっしゃいます。今から20年前に新聞やファックスの代読サービス、録音図書づくり等を行うボランティア組織、札幌リーディングサービスを設立され、声のボランティアの担い手を養成する分野でも御活躍されています。

そしてそのお隣が先ほど基調講演をされました笹井宏益様です。

それでは、これより先はコーディネーターの木村様に進行をお願いしたいと存じます。

木村様よろしくお願いいたいします。

木村氏 皆さんこんにちは。年末差し迫った時期にお集まりいただき、大変ありがとうございます。

きょうのパネルディスカッションのテーマは、そこに出ていますけれども、時代が求める生涯学習の役割とはということでもあります。笹井先生が丁寧に、今どういう生涯学習が求められているのかというお話をしてくださいましたので、私たちもそれを踏まえて討論していきたいと思っておりますけれども、きょうここにお座りになった方は、大変生涯学習にかかわるそれぞれが豊かな経験をお持ちですので、まずはお一人一人がどういう御自身で生涯学習にかかわっているのかということをお話ししていただいて、私たち一人一人が今どういう生涯学習が求められていて、札幌ではこれからどのように生涯学習を発展させていくべきかということをお話しして考えていきたいというふうに思います。

座って進行させていただきますけれども、それでは早速4人のパネリストの方たちに御発言をいただきたいと思っておりますけれども、最初に先ほど申しましたように、御自身の活動と生涯学習のかかわりについてお話をさせていただこうと思っております。

まずこの4人と私とで1時間ぐらい進めてまいりまして、そこでフロアの皆さんからも御質問や御意見を伺うという、そういう進行で4時まで進めていきたいというふうに考えております。

それでは、最初に札幌リーディングサービスグループ会長の田中隆子さんから御発言をお願いしたいと思います。よろしくお願いいたいします。

田中氏 御紹介いただきました田中隆子と申します。どうぞよろしくお願いいたいします。

生涯学習ということで、日々の動きを余りとらえてこなかったものですから、そういう視点からうまくお話をさせていただけるかどうか、ちょっと自信がありませんが。

現在やっておりますのは、先ほどお話しいただきましたように、視覚障害者の方たちに対する朗読ボランティアの活動を54人の仲間たちと一緒にしております。昭和62年に設立いたしました、20年目ということになりました。

個人的な朗読ボランティアとのかかわりについて申しますと、昭和40年代に民放のアナウンサーをしておりました。お隣にいらっしゃいます林美香子さんと同じ会社におりました。私はほんの少ししかおりませんでしたけれども、その後結婚しまして、すぐに視覚障害者の方の朗読ボランティア、当時は朗読奉仕というふうに呼んでおりましたけれども、その活動を始めさせていただきました。10年くらいしましてから、朝日カルチャーセンターというところから、朗読ボランティア養成講座の講師に出てこないかというお話をいただきまして仕事に復帰をいたしました。

何年かしましたときに、病気で失明をした少年から、テキストを読んでほしいという依頼

がありました。通信制の高校で勉強したいので、目が見えないのでテキストを朗読してほしいという要望でした。その当時、昭和60年代の初めには、目の不自由な方たちへの朗読のサービスというのは、貸し出し用の図書をつくるということが主体でありまして、お一人お一人のニーズにおこたえするという活動は、ほとんどと言っていいほど行われておりませんでした。その要望を聞きましたときに、これは貸し出し用の図書だけではなくて、一人一人の利用者の方の個人的なニーズにおこたえする組織が必要なのではないかというふうに思い至りました。たまたま周りには朗読ボランティアをしたいという、学んでいる人たちがたくさんおりましたので、その人たちに呼びかけて、昭和62年に札幌リーディングサービスグループというグループをスタートしたということで、現在に至っております。そんなところでよろしいでしょうか。

木村氏 田中さんは、先ほど生涯学習というのが個人のものから、だんだん公共性とか社会のためだというふうに考え方を進めていかなければいけないという笹井先生のお話だったのですけれども、もともとそういう自分が持って、経験の中で培ってきた技術というか、知識をそういうボランティア活動の中で生かすというところから始まったという、そういうお話をしていただいた。

田中氏 そうですね。

木村氏 どうもありがとうございました。

それでは、次に林さんにお願いしたいと思います。

林氏 きょうはたくさんの方たちに集まっていたいただいて、また、いろいろな世代の方たちが来てくださっているのがうれしいなということを思いました。というのは、いろいろな仕事で生涯学習に関するイベントのお手伝いなどに行きますと、どうしても割と年齢層の上の方が多かなという場合が多いのですけれども、きょうは若い世代の方たちも御参加で、とてもうれしいなというふうに思います。

私自身との生涯学習ということで、もともと習い事が好きだったなというのを今思い出しています。学生時代も、それからSTVのアナウンサーのときも、またフリーのキャスターになってからもいろいろな習い事をしてきていました。例えば英会話を習いに行ったり、お菓子を習ったり、あとワインが好きでワインコーディネーターのスクールに行ってその資格を取ったりもしたのですね。そういうふうに、土壌として何か習うことが好きということがあったなというのを改めて思っています。そして、仕事の中で司会の仕事だけではなく、例えば地域づくりのパネリストに呼ばれたりということがある時期からとても多くなっていったのです。

それと北海道庁の地域づくりアドバイザーをしていたときもあります。そのときにいろいろなフォーラムに参加しながら、単に取材しただけではなく、もっと総合的に、体系的に学ぶことができたらしいなということはずっと思っていました。

最初は農学部で学びたいとかいろいろ調べていく中で、たまたまチャンスがあって、北大の工学部のドクターコースで学ぶことができました。私自身のテーマは、都市と農村の

共生による地域再生の研究というテーマだったのですが、九州にあるツーリズム大学のことですとか、帯広にある北の屋台という仕組みを研究したり、その背景にあることを学びました。

なぜ大学院に行こうかと思ったかと言いますと、実は私の周りには社会人枠で大学院に通っている人がとても多かったのです。これは仕事柄ということもあるのだと思うのですが、男性、女性に限らず、北大の英文科に行っている友人がいたり、あるいは小樽商大の修士課程に行っている人、また東京はもっとそのあたりがとても熱心なようで、例えば転勤で東京に行った人が、法政大学の社会人の修士を取った後、もっと頑張ろうということで、今東大の大学院で学んでいる音楽ソフト会社のディレクターの友人などもいます。そういう人たちの話を聞いていると、仕事との両立はとても大変なだけけれども、でも大学院ならではの楽しさというのでしょうか、充実感があるという話を聞いて、私自身もいつかそういう勉強してみたいなということを思っていました。

また、息子の小学校のときのお友達のお母さんが、専業主婦の方だったのですけれども、北大の教育学部で修士課程で学んでいるお母さんとお友達になりまして、その人からもいろいろお話を聞いていて、私自身もいつかというふうに思っていたのです。

私の場合は仕事をずっとしていたものですから、息子たちがある程度大きくなって、時間的に余裕ができた段階でいよいよ入ろうというふうに思いました。そのときに、実際お金はかかりますよね。それは趣味としてはちょっと高いなというふうなことも思ったのですけれども、ただ私はS T Vでフルタイムからフリーになって、仕事の時間という点では、やっぱりフルタイムに比べると時間の余裕はあるのです。そういう中で、私がちょっと頑張れば通えるかもしれないという思いもあって通うようになりました。

実際通ってみると、大変なこともいろいろあったのですけれども、でも若い学生の皆さんと一緒にゼミに参加したり、また聞き取り調査に行ったりというのは、仕事では味わえない充実感というのを非常に思いました。今ひょっとするとこの中にも、大学院行こうかな、学費ちょっと高いよなとかいろいろお考えの方がいらっしゃるかもしれませんが、これは人生観の差もあるかもしれないのですが、すごく年をとったときに、やっぱりあのとき行けばよかったなと後悔するくらいだったら、私は行ってみた方がいいのではないかなというふうに思います。得ることがいっぱいあると思います。3年間でドクターを取ることができました。

また、大学に行ってみてこれはわかったのですけれども、国の施策の差ということもあるのですが、大学の体制自体が昔とは本当に変わってきているのですね。社会人にとってとても学びやすいシステムにもなっているなということを思いました。

私自身は、修士課程は通っておりませんが、修士は持っていなかったのですけれども、社会での経験を加味していただく形で、口頭試問の試験を受けてドクターコースで学ぶことができました。多分これも昔だったらなかったシステムだと思うのです。これは学部によって、大学によって随分差があるようなのですが、ぜひいろいろと調べてみるといいの

ではないかなと思います。

実際に北大に通ってみたら、クラークの会館前あたりで高校時代の同級生にばったり会ったんですね。えっと思ったら、その人は英文科の修士課程に通っていて、何か大学の中で、いわゆるおばさん世代の二人が大学生活を語れるというのは、本当に今の時代だからこそだなということを思いました。

例えば、有名な内館まき子さんも、東北大学で相撲の研究で通っていて、最近の本の中に養老院より大学院という本を出していらっしゃるのですが、私は団塊の世代の定年退職後の一つの道として、この社会人枠で大学院で学ぶというのは、すごくいい道なのではないかなということを思っています。

それと同時に、私は仕事の中で、実はスローフード運動ですとか、あるいはモエレ沼公園の活用を考える会という市民活動にも参加しています。今笹井さんのお話を伺っている中で、ああ私の市民活動とかスローフードの運動というのも、生涯学習だったのだなということを改めて思っています。ですから、生涯学習というのは決して大学院で学ぶこととか、大学に行き直すことだけではなく、いろいろな分野があって幅が広がっているのだなということも思います。

私自身、きょう笹井さんの基調講演を伺うことができ、とてもよかったなと思ったのは、市民活動などを行っている中で、やっぱりずっと市民活動に入って来てくださる方と、物すごくそういうことに敷居があるようにお感じの方もいらっしゃるのですが、市民活動に入っていく前の段階として、いろいろなことを学んでみるというのはとても重要なことだと思います。

私自身がなぜこういうふうにならな市民活動などをするようになったかということ、フリーになってすぐのころに参加した、女性と仕事というシンポジウムの中で、先輩のとてもすてきな女性の方が、社会人としての豊かな暮らしというのは、仕事人として、家庭人として、それから地域活動、またボランティア、こういったものがトータルでその人の社会人としての魅力が決まるのではないかというお話をなさっていて、物すごく私はその話に感銘を受けたのです。当時は子供がまだ小さかったので、正直家庭と仕事でもう精いっぱいな感じだったのですが、子供が大きくなったら徐々に地域活動とかボランティアとか、また学びということをやしていきたいなと思ってきて、私は徐々に徐々にあこがれの先輩の言葉を目指してきているのだなということをきょうのお話を伺いながらも改めて思いました。

また後ほど時間があれば、その市民活動の方のことももう少し詳しくお話しできたらと思います。

以上です。

木村氏 ありがとうございます。

林さんのお話しは、大学や大学院で社会人の人が学ぶということも、これは大事な生涯学習の一つなのですね。地域社会に参加する中で、林さんが自分のライフワークみたいな

ものを見つけて、そのために勉強するための大学院に入られて、またいろいろな生涯学習にかかわる知識や体験を重ねていったという、そういうお話をさせていただきました。どうもありがとうございました。

次に、久村先生にお願いしたいと思いますが、久村先生は大学で市民の皆さんのための公開講座だとか、そういうことをさせていただきだけではなくて、体と心の健康にかかわる医師でもあり、また今は札幌市の生涯学習の計画をつくる中心的な立場になっておられるわけですけれども、そういう立場に基づいて、生涯学習というのを久村先生なりにどういうふうにお考えになっているかというのを話していただきたいと思います。

久村氏 久村でございます。今、二人はアナウンサーの経験で大変弁舌がさわやかというか、話術が巧で、もうスタートラインから私は大変劣勢に置かれているということでございます。

冗談はさて置いて、私と生涯学習、この絡みとといいますか、出会いでございますけれども、先ほど御紹介ございましたから、もうざっくりばらんに申し上げますけれども、私は本職はお医者でございますして、大学を出てから25年間、いわゆる診療、それから教育、研究と、医学部及び付属病院という小さな世界で過ごしておりました。その当時は恐らく生涯学習という言葉なかったかと思うのです。恐らく社会教育というような言葉だと思っておりますけれども、そういう言葉すら知らないで過ごしておりました。

では、どこでそういう転機が来たかと言うと、これも先ほどもう固有名が出ましたので、私もそうさせていただきますけれども、平成3年に北海道医療大学に赴任いたしましたので、その翌年4年から大学が立ち上げております生涯学習事業、その委員になぜかしら組み込まれました。それが何と私が退職するまでの十二、三年間ずっと続きまして、その間委員あるいは委員長として大学の生涯学習事業の先頭に立って立案し、企画し、実施し、みずから参加しというようなことをさせられたというのがスタートでございますして、最後はもう大変楽しんでやっておりましたけれども、そんなこともございまして、平成12年にさっぽろ市民カレッジの運営委員なども2年ほど参加させていただいたというような経緯がございます。

では、今はどういう形で生涯学習にかかわっているかと申し上げますと、ちょっと話しが雑談めくのですけれども、今勤労者の心が危機的状況にあるのです。厚労省の調査、詳しいものはございますけれども、10人の一見健康そうな労働者がいると、そのうちの6人から7人は心理的には、心の中ではもうめたくたのストレスで、もうダウン寸前であるというデータが出ております。日本の産業を支えるこういった勤労者がそういう状況にあるというのは考えできないことございまして、私、昨年仲間10人ほどと「勤労者心の健康づくり協会」というNPOを立ち上げまして、今はその協会を通して、あるいはその協会の縁であちらこちらで、主にメンタルヘルスに絡む講座を開かせていただいていると。

最初は、勤労者が当然ターゲットでございましたけれども、勤労者を支える御家族の間

題でもあるということで、今はやはり勤労者プラス御家族ということで、結局はこれは市民参加の勉強会というようなことになっているわけでございますけれども、そのあたりが私と生涯学習との出会いと、その経過でございます。

木村氏 ありがとうございます。

久村先生が大学を離れてからも、その働いている人たちの心の健康の問題について、みずからNPOを立ち上げられて、そこでいろいろな市民との学習に取り組んでおられるという、そういうお話をさせていただきました。

今まで3人の方に、それぞれ御自身の生涯学習とかかわる今現在についてお話をさせていただいたわけですが、これを踏まえて、笹井先生、御自分が話されたことと、3人の御報告聞いて、一言お話ししていただきたいと思います。

笹井氏 済みません、何か初めのストーリーと全然違うのでどうしようかなと思っはいるのですけれども。

先ほど僕のプロフィールの紹介のときにも少し触れていただきましたけれども、私自身、今横浜でNPO法人をつくって、実際に生涯学習のいろいろな活動をしているのですね。そうなった経緯というのが幾つかありまして、自分の本職が国立の研究所に勤務して、しかも社会教育、生涯学習の仕事ということで、いろいろな都道府県や市町村の方が研究所にお見えになり、あるいは電話で話をしてくれるのですけれども、やはりこういうお金がどこにもないというか、本当は企業にあるのでしょうかけれども、国も地方もお金がない時代にあって、生涯学習や社会教育というのは、どんどん切り捨てられていってしまうというような、行政レベルの生涯学習の支援とか、社会教育の事業というか、どんどん切り捨てられていってしまうというようなそういう悩みというか、それをよく地方の方から聞かされるのですね。どうしたらいいのでしょうかと、場合によっては相談受けることもあるのですけれども、それ詰まるところ考えてみると、やっぱり今福祉はすごく問題になってますし、福祉の問題とか、あるいは景気の浮揚策といいたいでしょうか、そういう問題と比べると、やはり公共的な色彩というのでしょうか、公、社会に役立っているのだという意識がなかなかみんなの共有するものになってない、あるいは政治家の意識に根づいていないところがあって、では予算がないのだったら社会教育や生涯学習はもう要らないのでないかというふうになってしまうのではないかというふうに思うのです。そういうことを毎日経験してまして、これはやっぱり社会教育、生涯学習というのは、世のために役立っているのだということを何かしなければいけないというふうに思って、今でも思っているのです。だからそれは行政のレベルで、たまたま私の研究所が文科省の直轄の研究所で、文科省の連中にもそういう話も何度もします。そういう政策に切りかえてないからいけないのだということも何度も話をしています。

あわせて、自分でもやっぱり社会に役立っているということが人からも見えるような生涯学習の活動をしていこうということでNPOとかをつくったわけですね。折しも横浜市の場合は、中田さんという若手の市長さんで、すごく斬新なアイデア持って、いい人なの

ですけれども、やっぱり民営化というのでしょうか、できるだけ施設は民間に委託した方がいいというお考えをお持ちの人なのです。それはまあ施設によりますよという話を市長にも会って何度もしたのですけれども、なかなかそうもいかないで、それでいわゆる指定管理者制度と言われてますけれども、民間の団体に公的な施設の運営を委託してしまおうという制度が全面的に適用されて、いわゆる公民館的な施設とか生涯学習センターとか、全部民間に委託ということになったわけです。

実際にそこで委託を受けて、では受けたいという手挙げてきた人たちというのは、民間企業とかあるいは施設の管理会社とか、あるいはカルチャーセンター的な会社なのです。本当にこの地域密着型の事業が求められているのに、そういうところに任せてしまっているのかということも実は問題意識としてあって、それならば自分でNPOつくって、そこでいろいろな事業というか、そういう施設の運営を受託して、委託してもらって、それで社会に役立つような活動ができないだろうか、大げさに言えばですけれども、そういうふうにして実際に今やっているところなのです。

それで日本の、さっきの話に戻るかもしれませんが、やはり一人一人の豊かな人生というものがとても大事であり、それに生涯学習がかかわっていく、支援していくということは大事であることは言うまでもないのですけれども、その関連で言えば、今の安倍総理が進められている再チャレンジというような、いろいろな人にチャレンジの機会を与えて、それはある意味では生涯学習、学んでチャレンジしていくということだと思うので、そういう個人のチャレンジできる機会をつくる、生涯学習の機会をつくっていく、ある意味で、そういうことも、要するに競争社会の中では必要になってくるのかなとは思いますが、その一方でやはり競争にはやっぱり協調とか共生ということが伴わなければいけないと思うのです。

日本の社会というのは、国家と個人と人間的に考えられている節が多分にあって、もっと市民社会として成熟しなければいけないと思っているのに、その真ん中の市民社会が抜け落ちて、国家と個人という二つの関係で論じられるということが、私にとってはすごく危機感を覚えるので、社会をつくっていくような形で生涯学習をつくり変えていけたらなというふうに思います。

私のNPOの活動も、そういうところに少しは貢献できたらなというふうに思っているわけです。

以上です。

木村氏 どうもありがとうございました。

一通り4人のパネリストの方たちにお話をさせていただいて、それぞれが生涯学習にどのようにかかわっていらっしゃるかということについてお話をいただきました。

それで、パネリスト同士で、少しここで議論をしていきたいというふうに思うのですけれども、4人の方たちの報告を一応踏まえまして、大きく二つのことで少し話し合いを試みようかなというふうに思います。



一つは、これは生涯学習が公共性を持っている、世の中の役に立っているということとかが関わっているわけですが、ボランティアやNPOと生涯学習ということについてであります。もう一つは、いろいろな地域の活動する、あるいは地域で生活をしていく上で、生涯学習というのは欠かせないものになっているのだけれども、その生涯学習を進めるために大学院や大学に入って学ぶとか、あるいは大学がどういう役割を果たしているのかというような、そういうことについて話し合いをしてみたいなというふうに思います。

それで、まず最初にボランティア、NPOと生涯学習ということで話をしたいと思うのですが、先ほど田中さんはもう少し時間をとっていただいて結構ですので、多分いろいろなボランティアの活動や、あるいはNPOを立ち上げられるということで、いろいろなボランティア活動していく上で困っていることや、あるいはそういう中で参加して下さる方たちのいろいろな姿勢に感動したりとか、そういうようなことがあって、ボランティアを進めるために生涯学習に取り組んでいるという面もあるし、恐らくボランティア活動を通じて御自身が生涯学習になっているという、そういう面もあると思いますけれども、そういうことについてお話をしていただけますか。

田中氏 私は、常日ごろ朗読と朗読ボランティアという大変狭い世界だけ生きておりますので、一般にお話しできるかどうかわかりませんが、日本人が日本語を読むのである以上、だれが読んで大丈夫でしょうという考え方があると思うのですが、中身を、いろいろなものをお読みすることになりますけれども、その書いてある中身を耳だけで聞いてくださる方に正確にお伝えできるようにするためには、多少の訓練が必要だということがあるのです。それで、絶えず自己研さんをしながら、少しでもいい録音テープ、あるいは朗読を利用者の方にお届けしていきたいですねというのが、私どもの常日ごろの姿勢なのです。絶えず月1回の研修会をすとか、そういうことで勉強をしながらお役に立つ方向を探っているということになります。

私自身は、札幌市内の教室だけではなくて、全道各地の朗読ボランティアをやってらっしゃる方たちの研修にお招きいただくことが多いのですが、そこでもやはり皆さん真剣に読むことを通して、何か少しでもお役に立ちたい。そして一人ですと絶対に読まないという、触れないというような本の御依頼もたくさんありますので、そういうものを録音してお届けするという中で、いろいろなことを学ばせていただいているなというふうに思っております。

木村氏 どうもありがとうございました。

ボランティア活動そのものは、自主的、自発的なものなだけで、そのサービスを提供する人たちに、よいサービスを提供するためには、ボランティアの人たちが自分たちでもっと技術というか、スキルを高めていくような学習をしなければ、この人たちのニーズにこたえることができないのだという、そういうことで継続的な学習されているということですね。

田中氏 そうです。

木村氏　そういう中でいろいろな方たちがいらっしゃると思うのですけれども、何かそういうときにボランティア活動に参加してくださる方とか、あるいは朗読教室にかかわっている人たちの中で、何かお感じになった生涯学習に対する姿勢とか、そういうもののお気づきになったようなことはないでしょうか。

田中氏　そうですね、いろいろなことがありますけれども、だんだん私の仲間も、一緒に教室に学んでいる人たちも、だんだん年をとってまいりましたので、例えば家族が病気になったり、あるいは伴侶を亡くしたりとか、そういうような人たちも出始めているわけですが、そのときに一生懸命に勉強をして、一生懸命に活動をしている人たちにとっては、朗読あるいは朗読ボランティアは、大変困難な状況から立ち直るときのつえになっているなということが、このところ大変感じるがあります。

木村氏　それは、やっている人もそうだというお話です。やっている人自身が。

田中氏　そうですね、はい。

木村氏　1992年の生涯学習審議会の答申で、ボランティア活動と生涯学習との関係というのが整理されて、三つに整理されたわけですね。ボランティア活動自体が自己実現につながる生涯学習なんだということと、それからボランティアを進めるためには、生涯学習をしなければボランティア活動は進められないのだということと、それから生涯学習をする人のためのボランティア活動というのがあるのだという、そういうふうに整理されたと思うのですけれども、今田中さんがおっしゃったのは、まさにそういうことをみずからの経験の中で感じておられるということだったというふうに思います。どうもありがとうございました。

ボランティア活動の意義ということについてももう少し、あるいは最近はそのボランティア活動を継続的に進めるためにも、NPOという活動が大事な活動として取り込まれるようになってきているわけですが、笹井先生自身は先ほども、横浜で今指定管理者制度が社会教育施設あるいは生涯学習に関連する施設に導入される中でかかわっておられるのですけれども、そういう中で感じておられるボランティアやNPO活動に参加することの意義だとか、あるいはそういう活動が今生涯学習として取り込まれることで、どういう問題を抱えているのかというようなことについて、少しお話ししていただけないでしょうか。

笹井氏　私自身思うのですけれども、ボランティアの最大の魅力とは何かといつも思うのですよね。これはいろいろな意見があるかもしれませんが、すぐお友達になれるという、変な言い方ですが、初対面の人でもすぐ人間関係が持てるようになるということが最大の魅力ではないかなというふうに思っています。これは一緒にボランティア、仲間との関係もそうですし、ボランティアする相手方との関係もそうなのです。普通考えてみると、人間関係がうまく形成されるというのは、ある程度時間が必要なわけですね。これは地縁型の隣近所とおつき合い考えてみればわかりますように、隣近所と仲よくなるというか、人間関係ができるためには、あそこの家のおじさんがどういう性格でとか、おばさんがどういう家庭でとかということがわからないと、なかなかその人間関係

できない。一遍できると、それが助け合いの関係になったりするのですけれども、時間がかかるわけです。ところがボランティアの場合は、そういう時間の経過なしに、ある種の使命感というか、ミッションが同じなので、そこをお互いに共有しているということがわかると、その瞬間に人間関係ができるというような、そういうところが最大の魅力だと思うのです。要するにつながりがすぐつくれるということは、その相手とのコミュニケーションがすぐできる。その中で、自分のある種の安心感とか安定した感覚とか、あるいは新しい知識とか、新しい発見というか、新しい世界を知るといようなことがあるわけですね。つまりボランティアの魅力というのはすごく、学ぶことの魅力と同質であって、ボランティア活動をするということは、先ほど木村先生もおっしゃってましたけれども、やっぱり生涯学習の一環なのです。人とつながることが、それ自体が学びにとって非常に大きなきっかけというか、大きな成果、影響を与えているというふうに思うのです。そういうふうに自分がやってみて、つくづくそれを思うということが一つです。

ただ、実際にまとまって何かやったりとか、何かネットワーク、協働とか、口で言うのは簡単ですけれども、意思疎通がうまくいなくて行き違いとかあって、トラブルも結構起こるのです。人と人と、個人と個人のトラブルもあるし、あるいは団体と団体とか、あるいは団体と行政、僕も施設の運営委託されてますけれども、僕行政の委員も結構やっているのですけれども、行政とトラブルしょっちゅうあるわけですね。意思疎通の違いとかあって。そういうそのトラブルを乗り越えていくような、特に地域という場で乗り越えていくことが必要であるならば、そこにある種のコーディネイトといいましょうか、その間に入ってお互いのことをよく知って、うまく調整していくような人たちというのがやっぱり必要ではないかなというふうに思うのです。だから魅力もあるけれども、それを実践する上ではいろいろなトラブルもあるし、そういうそれを解決するというか、少しでも克服していける知恵というのが求められているのだろう、それは率直にそう思います。

以上です

木村氏 どうもありがとうございました。

ボランティアという活動がどういう学びや、そこに喜びを持てる活動なのかということについてお話をさせていただきました。

ボランティアについては、今お二人にお話をさせていただきましたので、これぐらいにしておきたいと思いますが、もう一つは、地域でいろいろ活動したり生活をしていたりする上で、大学や大学院で学ぶということの意味について、次の話題を移したいと思いますが、林さんに先ほど御自分の社会人大学院生の体験についてお話をしてもらって、最近は大学も変わっていて、なかなか社会人を受け入れるに当たって、改善されているのだというお話をしたのですけれども、実は私も社会人をたくさん受け入れている大学の教員ですので、私自身はまだまだ大学は、社会人の人たちを受け入れるように確かになっているのだけれども、それにこたえるようなシステムにはまだまだなっていないというふうに感じておりましたので、ちょっとおもはゆいような感じもする。きょう参加者の中には、実は

私のところで社会人大学院を卒業した人もいらっしゃるのですけれども、もう少し林さんが大学院でどういうことを勉強して、それをどういうふうに生かしたいというふうに思っているのかということも絡めて、その社会人大学院のことをお話ししていただければでしょうか。

林氏 私の場合は、フリーランスで働いているので、自分で時間をつくることのできるので通いやすかったというところは正直あったと思うのです。フルタイムで働いている人が、本当に社会人枠の大学に行こうと思うと、相当やっぱり時間のやりくりとか、そのあたりが大変な面もあるのかなと思います。大学院で今夜間とか土日を上手に使ったり、またメールのやりとりでというようなところも出てきていますけれども、特に日本のある意味では企業人の姿勢というのでしょうか、残業が多い職場だと、きっと社会人枠で大学院に通うのはすごく大変だろうなということは思います。そのあたりがもう少し、そういう意味では欧米風に、時間がきちっと決まっていて、例えばアフターファイブ、本当に自分のために使えるというような社会人がふえていけば、もっともっと学びやすくなるのではないかなということは思います。ですから、私の場合は学生のゼミに参加することができましたけれども、同じ時期にほかの大学の教員をしながら社会人枠で通っていた先生は、やっぱり御自分の大学の会議とかいろいろなことがあって、たまにしか出てこれないというようなことがあったのです。そういう意味では、もっと夜間とか土日とかそのあたり、逆に教える先生たちにとってはとても大変なことかもしれませんが、そういういろいろな配慮があると、もっと学びやすくなるのかなということは思いました。

ただ、今ある意味では外資系という変ですけれども、海外の大学がMBAなど日本でとれる、しかもネットを活用してとれるような大学が随分入ってきますよね。そういう意味では、そういうところとやっぱり日本の大学も戦わなくてはいけなくなるわけですから、私はもっともっと対外国との中で、日本の大学も社会人にもっと学びやすくなるのではないかなということを思います。

それと大学院のことではないのですが、先ほどのボランティア活動のお話しなども関連して、たまたまスローフードのことでちょっといいですか。

北海道スローフード宣言というようなものも出して、これは道庁の中の委員会のようなボランティア活動のグループなのですが、ホームページなどにもスローフードで引くといういろいろ出てきますので、ぜひお読みいただきたいのですけれども、そのスローフードというのは地産地消を進めるとか、小さな生産者を守る、そしてもう一つの大きな柱が食育なのです。食べ物の教育。この食育に関しては、もちろん家庭でもすごく今頑張っているし、学校も頑張っているのですけれども、私はまさに生涯学習として、この食育に取り組んでほしいなということも思っています。というのは、先ほどの笹井先生のお話しの中でも、自立した市民として、経験や学習の成果を生かした市民相互の生涯学習支援という項目が出てきたのですけれども、例えば土地のおじいちゃんやおばあちゃんが、その土地の郷土料理を地元の子供たちとか若いお母さんに教えていくというのはすばらしい食

育であり、生涯学習なのです。これは私もっともって北海道内でふえていくといいなということを思っています。

私自身は道南の乙部で、そういった地元のおばあちゃんたちが孫たちのような世代の小学生にお料理を教えるという場面に遭遇しまして、本当にいい時間をみんなで過ごすことができたのです。こういうふうに市民同士が教え合うというような食育、ほかにもいろいろあると思うのです。おじいちゃん、おばあちゃん世代の知恵を若い世代に教えていく、このあたりは私もっと、札幌は都会化が進んでいますけれども、その土地ならではの知恵を伝えていくという意味でも、生涯学習の中にそういうものが入っていくといいなということを思います。

あと、地域活動と大学という点で言うと、私自身が調査をしました九州ツーリズム大学も、帯広の北の屋台も、やっぱり知恵袋としての大学の先生というのは、やっぱり物すごく重要だなということを思いました。九州のツーリズム大学も、熊本大学の先生とか早稲田大学の先生など、やっぱり物すごい支援している先生たちがいらっしゃるんですね。また、帯広の北の屋台も道内の先生はもちろん、本州の先生たちもすごくいいアイデアを出し、また市民活動を勇気づけているというのでしょうか、そういう役割としての大学院、あるいは大学院生の若い学生さんたちが九州ツーリズム大学で講師役をしたりという事例もいっぱいありまして、そういう意味では、地域活動と大学の協働というのは物すごく重要なのではないかなということを思います。ですから、大学自体も、より開かれた大学であるべきなのではないかなと思います。そういう意味では、北海道大学も遠友学舎という北18条にあるすてきな建物があるのですが、そこで市民公開講座を開いたりしてますよね。そういうところに市民の人たちが出かけて行くということも、本当に生涯学習として意味のあることなのではないかというのを思います。

以上です。

木村氏 ありがとうございます。

大学に勤める者としては、林さんの御意見、大変ありがたい御意見だったですけれども、後で少しさっぽろ市民カレッジの関係なんか私の方からお話をしたいと思っておりますけれども、久村先生、今久村先生はずっと大学の側で公開講座とか開催されて、今現実に地域の方々の生涯学習にかかわっている中で、大学の役割のようなことも含めてお話をいただけないでしょうか。

久村氏 久村でございます。その前に、今ちょっと遠友夜学校という話が出ましたけれども、恐らく御存じない方もいらっしゃるかと思いますが、これは札幌農学校時代に新渡戸稲造先生たちが立ち上げた、いわゆる当時の恵まれない人たち、あるいは女子とか恵まれない人たちに対する夜間の学校だったわけです。それがずっと続いてました。しかし、そのうちに何とはなしに消えてしまったのですけれども、またいつのころでしたか、それが復活して、今度は北大自体も、同窓会レベルですけれども、それを支えるという形で、今定期的に勉強会開かれて、そういう施設でございます。

大学の話ですけれども、その前にもう一つ、地域との関連で申し上げますと、いろいろなところで生涯学習ということで講師役を務めさせていただいておりますけれども、私はそういう経験を通してまず感ずることは、私どものは教える側です。皆さんの中にもそういう立場の方いらっしゃると思いますけれども、教える側が、ただ専門知識持っているだけでは何の役にも立たないのです。少し言い過ぎかも知れませんが、ただ一方的に教えるだけであれば、専門的なこと教えるだけであれば、それは教育であって、学習ではないのだと。やはり私が今痛切に感じてますのは、その伝えたことがいかに理解され、いかに体得され、いかにあすからの生活に生きているかと、そういうような感じで進めないと、これはもう生涯教育やったやったと自己満足に陥るだけだと、そう感じております。

まずそれは前段の1点で、あと大学というか、高等教育機関と言いかえてよろしゅうございませぬけれども、実際この生涯学習ということに関して言うと、この高等教育機関は、そのかなめだろーと思ひます。そして今も少しお話しございましたけれども、私どもが学生時代のときの大学と、今はもうさま変わりしてあります。例えば、まず学ぶ大人、成人学習者と普通言っているみたいですが、この人たちは正規の学生として受け入れている。例えば社会人入学はそうですし、科目履修生がそうですし、また昼夜開講ということもございませぬ、また通信教育もあるというぐあいに、もうがらっと変わっております。大学自体も変わらなくてははいけぬ。大学のこの教育機能を開放しなくてははいけぬということで、さまざまな試みをされているわけだ。このあたりは、司会の木村先生の最も得意の分野ですが、例えば公開講座です。あれはたくさんとにかく提供する。あるいはまた一部の大学、これは主に旧国立大学が主体でしたけれども、生涯学習教育研究センターというのございませぬ、そこでこういう方面のいろいろな研究等を学問レベルのところから、また市民レベルのところから研究されていると。かなり大学自体が変わってきてあります。

それともう一つ、この大学が公開講座等を持つ意味、理由は、今御存じのとおり、もう大学へ入るとすぐ専門教育です。一番大切と言われている教養課程が非常にないがしろにされている。そういうないがしろにされている教養課程の代替役をも大学の開放がなし遂げているということでございませぬ。ただ、これだけ各大学が意向を凝らしながらたくさんの公開講座を打ち出しますと、実は量がふえてくると質が落ちるのは例えどおり、自分の1年間あるいは半年の講義の中の一コマだけをとってきて、いかにも公開講座と名を売って過ごす教員もなきにしもあらずなわけだ。

もう一つ最大の弱点というか泣きどころは、専門スタッフのいないことだ。もうほとんど、早稲田大学なんかは別というふうにお聞きしておりますけれども、ほとんどの大学の講座は、生涯学習教育の講座は、もう兼業だ。本来の仕事があつて、それに加えて、それをボランティア的にやっていると。ここのところから、物理的にもう時間のあんばいがつかないということから、ついつい昨年と似たようなこと、一昨年と似たようなことという

ような学習の提供になってマンネリ化していくと。そのあたりが、私がふだん考えているこの大学の、生涯学習教育における大学の実情かなというふうに考えております。

木村氏 どうもありがとうございました。

市民が地域でいろいろな活動をするとか、社会参加をする場合に、生涯学習というのが大変大事になってきているわけですが、その生涯学習をどのように進めるのかということについて、今のお話しは、私たちはもちろん地域の、例えばこのちえりあのさっぽろ市民カレッジで学ぶというのも一つの方法だし、あるいはもっと今の段階ではちょっと決断がなかなか大変なところもありますけれども、大学に入って学んでみようかなというような、もうそういうことがもっと自由にできる、気軽にある意味では判断ができて、多様な形で学べる社会というのが、私たちが求める社会なのではないかなというふうに思うのです。

北大の場合は、今いわゆる社会人の大学院生という方が450名ぐらいいらっしゃいます。それで、林さんがお話しになったように、そういう方たちを受け入れる条件がだんだん広がってきてはいるのですけれども、ですから今は夜に授業をやったり、土曜日に授業をやったりするというのもふえてきました。それで、たださっきも林さんがおっしゃったように、大学に行くときは周りの人もみんな祝福してくれるわけです。ああよく試験に受かったね、頑張ってきてとか、うちの職場にそういう人がいるのはとても誇りでもあるから頑張ってくださいよというふうに言われて出て行くのですけれども、修士論文を2年かかったり、ドクター論文は普通3年かかるわけですが、なかなか社会人をやりながらだと、2年や3年でできなかつたりするような場合になると、例えば忙しくなって、きょうはどうしても大学に行かなければいけない、残業をやめて行かなければならないというふうになると、だんだん周りの目がちょっと冷たくなって、まだやっているのかというふうになつたりするというようなこともあって、大学院生の中には、そういうことをもう少し職場に理解してもらえるように、大学の側も努力してもらえないでしょうかというふうにおっしゃる方もいらっしゃいます。もちろん、ですからそういう地域社会というか、職場の中で学びたいという人を喜んで送り出すような、そういう雰囲気をつくるといことも大事なわけです。

大学もそういう意味では、今まではどちらかというと大学院では研究者とか、大学の先生を養成するという仕事をしてきたわけですが、社会人の人たちが自分が学んだことを生かしてもう一度職場に戻るとか、地域で活動するということになる、また違ったその人たちへの教育のあり方も変わる。私は、そういう地域のいろいろな職場の問題だとか、地域の生活を抱えた人たちが、大学や大学院でそういう問題を解決するために学ぶということが大学の学問、研究や教育にすごくプラスになるという、そういう双方向の関係をつくるということになるというふうに思っています。

それで、ちょっと大学院に入るとか、大学に入るといこと自体は普通、きょうも参加してくださった皆さんからすごく遠い話のように思われるかもしれませんが、いわゆる大

学、大学院レベルの学習をしながら、それを地域の問題の解決に役立てようとか、もっと職場での専門性を高めていこうという、そういう考え方に立ってつくられたのが、さっぼろ市民カレッジなのです。ここにはいろいろな大学が連携して学習機会を提供して、皆さんのための学習講座をいろいろやっていますので、そういうところで学んでいただくというの、ある意味では大学と皆さんがアクセスするということになっているわけです。

北大は公開講座をやりますと、アンケート調査なんかをすると、公開講座の受講生のうち、4割ぐらいの方は大学院で、あるいは大学に入学して学ぶということに関心を持っているというふうにお答えになって、そういう意味では、地域で学ぶ人たちの中にもそういうことがある意味では、これからは当たり前のような社会に少しずつなりつつあるのかなというような気がしております。

それで、一通りパネリストの方たちに御発言をいただいたのですけれども、せっかくの機会ですから、フロアの方からも御意見や御質問を伺いたいと思います。いかがでしょうか。御自由に、4人の方への質問でもいいし、皆さんの御発言を聞いて、私はこういうふうに思いますというふうに、そういう御意見を言われても大変ありがたいと思いますが、いかがでしょうか。

#### 【 以下、質疑応答 】

木村氏 皆さんから積極的に御意見、御質問いただいて、大変議論が実りあるものに近づいたのではないかなというふうに思います。

それで時間が来ましたので、これでまとめさせていただきたいと思いますが、最初に御質問がありましたね。例えば市民の生涯学習の機会で学んだことが、もう少しきちんと評価されて、大学の単位にもならないのかなというようなことをおっしゃられました。基本的には、さっぼろ市民カレッジも道民カレッジも、将来的にはそういう、そこで学んだことが、それなりに評価されるようにしていこうという、そういうことでずっと考えているわけです。

大学の方も、さっき林さんがおっしゃられましたけれども、社会的な経験、体験を評価して、大学に学んでいただくというそういう方向になってきていますので、基本的にはやっぱり特にさっぼろ市民カレッジについて言うと、もう少し市民の方たちがこういう中身で学習してもらって、その方たちが地域で大変積極的に活動してくださっているのだというようなことを、もう少し一つの講座で学ばれていることをきちんと評価しながら、市民の方たちに知っていただくということが大事になっているのではないかなというふうに思います。それは市民カレッジとしても大事な課題ですので、これからはそういうことをやっていかなければいけないなというふうに思っております。

それと、先ほどは若い人がなかなか参加しないという問題もおっしゃられましたし、それから大学だとか、生涯学習の機会にもっとわかりやすくしてはどうかなという、まさに



そのとおりで、若い人が来ないということについては、いろいろな理由ありますけれども、基本的にはやっぱり若い人たちが学びたいと思うような中身が提供されていないということが基本的なことで、どういう中身をやればいいのかという、それはとても難しい問題なのですけれども、それは多分このちえりあの財団の職員の人たちも、もっと若い人たちに来てもらうためにはどういう、例えば中身のことでなく、学習の進め方も含めて、どういうふうにしていったらいいのかというのは、これからの課題になっているのではないかなというふうに思います。

きょう笹井先生の話から始まりまして、要するに今までは生涯学習というのは個人のための生涯学習だったのだけれども、これからはいわゆる共生だとか、それから公共性だとか、そういう自分のためであると同時に、周りの人たちのためでもあるし、社会のためでもあるというような、そういう学習が必要になってきているということでお話をさせていただいて、それにふさわしい地域のNPOやボランティア活動のために皆さんが生涯学習にかかわっているというお話をしてくださったというふうに思います。

きょうの皆さんの御意見や御質問も含めて、行政がそういう生涯学習を進めるためにどういう条件整備をしなければいけないのかというようなことも含めてお話しがされましたので、特に久村先生と私は、そういうことも踏まえながら教育委員会の皆さんと一緒に札幌市の生涯学習をこれからどういうふうに進めていくかということについてももう少し話し合いを続けて、いい計画をつくっていきたいというふうに思います。

きょうは4人のパネリストの方たち、笹井先生は遠くから来ていただきましたけれども、大変ありがとうございました。

それから、年末で忙しい時期にもかかわらず集まってくださった参加者の皆さんに感謝を申し上げて、きょうのパネルディスカッションを閉じたいと思います。どうもありがとうございました。（拍手）